

**2024年の立冬は、11月7日（木）です。**

立冬は秋分と冬至のちょうど中間で、暦の上ではこの日から冬になります。木枯らしが吹き、冬型の気圧配置に変わってくると本格的な冬の到来です。鮮やかだった木々の葉もだんだんと色あせ、冬枯れの様子が目立つようになります。日が暮れるのも一段と早まります。北国からは初雪の便りも届き始めます。上旬はまだ時おりあたたかな陽気の日もあるはず。そんな日を「小春日和」と言います。

「こよみの上では冬の始まり」と聞くと、少し季節を先取りした感じがしますね。これからの行楽のベストシーズン、季節の移り変わりを感じながら楽しみましょう。

### 1. 紅葉狩り

紅葉を鑑賞する習慣は奈良時代から始まったといわれ、「万葉集」にも登場しています。平安時代の頃に貴族の間で広まり、紅葉を愛でながら宴を開いていたようで、その様子は「源氏物語」にも描かれています。その後、江戸時代には庶民も楽しむようになり季節の行事として定着していきました。



### 2. 実りの秋

秋は穀物や果物などの収穫が多く、「実りの秋」を連想する人も多いでしょう。「食欲の秋」を思い浮かべる人も少なくありません。秋は作物への感謝と翌年の豊作を祈り、各地で秋祭りが開催されます。その代表的なものが、伊勢神宮をはじめ各地で開催される「新嘗祭」です。神様に新穀（その年にとれた米などの穀物）をお供えし、新穀を得たことを感謝するお祭りです。

### 3. 収穫に感謝し厄除けを祈る冬の火祭り火焚祭 11月8日（金） 13:00～

火焚祭は今年一年間の収穫に感謝する行事で伏見稻荷大社のものは全国一のスケールで、立ち上る炎に圧倒されます。その起源には諸説ありますが、宮中行事である新嘗祭に由来するとも、太陽の力が一年で最も弱まる冬至に合わせて行われることから、その復活を願ったことに起因するとも言われています。本殿の祭典のあと、火焚きの儀が行われます。本殿裏手の斎場に3基の火床を設け、神田でとれた稲のわらを燃やし、恵みをもたらしてくれた神を山に送ります。その際、全国から寄せられた10数万本の願い事が書かれた火焚串を焚き神楽舞が行われます。



「立冬」。暦の上では冬の気配が現れるころ。

俳句の世界では、「冬立つ」「冬来たる」「冬に入る」という季語も、立冬を表しています。立冬は、木枯らしが吹きはじめる季節ではありますが、地域によっては、まだ秋の盛り。正岡子規が立冬に寄せて詠んだ句。

『菊の香や 月夜ながらに 冬に入る』 正岡 子規

菊の香りがするなあ。よい月夜であるけれど、暦の上ではもう立冬だ。

菊の香りが漂う月のきれいな夜だけど、もう冬に入（はい）ったのだなあ・・・と季節の移り変わりの早さを詠んだ句です。

実は、この句にある「菊」と「月夜」は秋の季語で、「冬に入る」は冬の季語。

このように、異なる季語がいくつも使われている句は珍しいようです。

季節の境目がわかりにくくなった昨今の気候に慣れた私たちには、共感しやすい句かもしれませぬ。

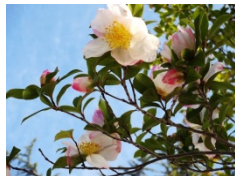
「立冬」の夜、きれいな月が出たならば、この歌を思い出しながら眺めてみませんか。

七十二候によると、立冬の最初の5日間は「山茶始開」。

「つばきはじめてひらく」と読まれています。山茶（つばき）とは椿ではなく、冬のはじまりに花を咲かすツバキ科の山茶花（サザンカ）。

赤やピンクの花を咲かせ、その呼び名は中国語の「山茶（さんさ）」が語源です。

サザンカとツバキは、どちらも冬に花を咲かせますが、開花期には少し違いがあります。サザンカは10月頃から花を咲かせますが、対するツバキの開花期は11月中旬以降。サザンカとツバキには、花の咲き方にもそれぞれ特徴があります。サザンカの多くは完全に平開して咲くのに対して、ツバキの花は、平たく開いて咲くことはほとんどなく、カップ状になることが多いです。



サザンカの花には香りがありますが、ツバキには香りのある品種は少ないです。

山茶花（サザンカ）は、童謡の「たきび」の二番の歌詞に登場する花で、冬の季語です。

♪さざんかさざんか咲いた道♪たきびだたきびだ落ち葉焚き...

一方、椿は春に開花し、花びらが根元でつながっているため、散る際には花ごとほとりと落ちます。歌ではアンコ椿は恋の花（都はるみ）や雪椿（小林幸子）など椿を歌った歌は数多くあります。